

『うつほ物語』源涼がもたらした富の諸相

猪川 優子

はじめに

吹上巻で登場する源涼は、紀伊の国吹上の地で、富豪の祖父神南備種松と祖母の庇護のもとに暮らしていた。登場後、涼が嵯峨院の落胤であること、弥行なる人物から七絃琴の秘技を受け継いでいることなどが明かされ、仲忠と並び立つ貴公子として物語に位置付けられていく。

涼と他の貴公子とりわけ仲忠との違いは、破格の財力である。後ろ盾となる祖父の巨財は惜しみなく涼に注がれ、涼の財力は物語終局まで揺らぐことも尽きることもない。稿者は以前、涼の財力に着目し、物語で圧倒的な政治力を誇る源正頼一族がその勢力に翳りを見せる一方、源涼が圧倒的な財力をもとに新たな源氏の担い手として物語に台頭することに言及した^①。涼の財力は常に正頼家に見せつけられる。あて宮求婚譚が終結し、涼をはじめ多くの貴頭が正頼に婿取られるが、後に次々と婿たちは正頼邸を去り、最後に涼も正頼邸を去る。正頼から離れ、新たな居を構えた涼は、財力だけではなく政治力を持つ人物へと成長するこ

とを予感させるのである。

本稿では、涼が登場することによって変容した物語世界の富について論じるものである。物語に描かれる富は、吹上上・下巻を境に様相を異にする。その様相を読み解き、涼が物語にもたらした富の諸相を明らかにしたい。

一 源涼の財力

吹上上巻は、次のように涼の祖父種松の紹介から始まる。

かくて、紀伊国牟婁郡に、神南備種松といふ長者、
限りなき財の王にて、ただ今、国のまつりごと人にて、
かたち清げにて、心つきてあり。
(吹上・上)

傍線部のように、種松は物語に登場する「財の王^{たから}」の一人である。その財力は、「財は、天の下の国になき所なし。新羅・高麗・常世の国まで積み納むる財の王なり。」と記され、その住居は次の通り贅を極める。

吹上の浜のわたりに、広く面白き所を選び求めて、金銀・瑠璃の大殿を造り磨き、四面八町の内に、三重の垣をし、三つの陣を据ゑたり。宮の内、瑠璃を敷き、おとど十、廊・楼などとして、紫檀・蘇枋・黒柿・唐桃などいふ木どもを材木として、金銀・瑠璃・車渠・瑪瑙の大殿を造り重ねて、四面巡りて、東の陣の外には春の山、南の陣の外には夏の陰、西の陣の外には秋の林、北には松の林、面を巡りて植ゑたる草・木、ただの姿せず、咲き出づる花の色・木の葉、この世の香に似ず。梅檀・優曇、交じらぬばかりなり。孔雀・鸚鵡の鳥、遊ばぬばかりなり。

(吹上・上)

この吹上の住居は、從來四方四季の館として論じられてきた。室城秀之氏^③は吹上の宮の空間を、俊蔭が仏の予言を得た「仏の御国」の東で天界に通じた「中なる所」を意識した空間であり、俊蔭の波斯國漂流譚の物語空間の変容であるとする。本稿では、俊蔭巻の物語空間が吹上巻の物語空間に影響を及ぼしたことにとどまるのではなく、さらにその先の物語空間への影響の様相を捉えていく。

物語きつての財力を誇る種松には、孫に対する並々ならぬ思いがあった。嵯峨院の皇子でありながら自分の娘が母であつたばかりに不遇を強いられる孫涼に、種松は「その代はりに、わが国の内にだに、我一人して、国王の位に

劣らぬ住まひせさせ」と、帝に匹敵する暮らしをさせようと奮闘する。その暮らしぶりが都へと伝わるのが吹上・上巻における貴公子たちの来訪である。

嵯峨院の御落胤の噂を聞きつけた仲頼、行正、仲忠たち一行は、都からはるばる吹上の地を訪れる。迎えた種松側は、贅を尽くしてもてなし、そのもてなしぶりは物語空間を煌びやかに彩る。次にその様相を取り上げ、物語における位置付けを明らかにしていく。

二 吹上の富 — 金細工 —

吹上に到着し歓待を受けた一行は、涼とともに林の院へと花見に向かう。その日の接待役は種松の妻、故大納言源恒有の娘であつた。種松の妻は宴の場に次のような細工物を届ける。

宮より、種松が妻君、合はせ薫物を山の形に作りて、黄金の枝に白銀の桜咲かせて立て並べ、花に蝶どもあまた据ゑて、その一つに、かく書きつく。

桜花春は来れども雨露に知られぬ枝と見るぞ悲しき

とて、よき童して、林の院に奉れり。(吹上・上)

凝った細工物の背景には、豊かな財政と高い技術がある。齋藤^④氏は、種松たちが金銀の私鑄銭を鑄造できた「財の王」であるとする。吹上には、種松が配した工房が存する。

(吹上・上)

かくて、名ある限り、は父しをて、鑄物師・絵師・作物所の人・金銀の鍛冶などを、所々に、多く据ゑて、世にありとある物の色を、ありがたく清らかに調じ設くること限りなし。「山を崩し、海を埋めても、わが君の願ひ給はむものを仕まつらむ」と急ぐ。

(吹上・上)

これらの工房は、「絵解」に次のように記される。

これ、作物所。細工三十人ばかり居て、沈・蘇枋・紫檀らして、破子・折敷・机などもなど、色々に作る。轆轤師ども居て、御器ども、同じ物して挽く。机立てて、物食ふ。盤据ゑて、酒飲みなどす。

これは、鑄物師の所。男ども集まり、蹈躑踏み、物のこかた鑄などす。白銀・黄金・白鐵などを沸かして、旅籠・透箱・破子・餌袋、海・山・亀・月、色を尽くしてし出だす。ここにも、皆物食へり。

ここは、鍛冶屋。白銀・黄金の鍛冶二十人ばかり居て、よろづの物、馬・人・折櫃など作る。

本稿で特に注目するのは金細工である。種松の妻が用意した細工物にも「黄金の枝に」と金が使用されている。金細工以外に、吹上滞在中の饗応において金の食器が多用されているなど、吹上での金の印象は強いのであるが、なかでも種松が訪問客たちに用意した土産物は豪奢である。

かくて、種松調ぜさするほど、贈り物に、(略)海の形を、白う、白銀散らして鑄て、合はせ薰物を鳥の形にし、沈の枝に作り花をつけて、鳥に植ゑ集めて、さやうの物を、鹿・鳥に作り据ゑ、いとをかしげに、大きやかなる黄金の船据ゑ、それに色々の糸を結び、袋に面白き物を結び据ゑて、薬・香を包みて、組して上を包みて船になし、沈の折櫃に白銀の鯉・鮒を作り入れ、白銀・黄金・瑠璃などの壺どもに、さやうの物を入れて、麻結などして担ひ持たるにて、船子・揖取立てて、三所に同じごとしたり。

(吹上・上)

傍線部の黄金の船は、仲忠があて宮に贈ることで注目される。吹上から帰京した一行は、土産物を貴顕たちに献上するが、あて宮を恋慕する仲忠は特別な品として黄金の船を贈るのである。

仲忠は、大殿に車牛二つ・馬二つ、侍従の君に鶴駁なる馬の丈八寸ばかりなる一つ。置口の衣箱一つに、あるが中に清らなる女の装ひ一具畳み入れ、一つには麗しき絹・綾など入れて、孫王の君に心ざし、黄金の船に物入れながら、かく聞こえて、あて宮に奉る。

荒るる海に泊まりも知らぬうき船に波の静けき浦もあらなむ

とて奉り給へり。

さて、宮・君達など、「ありがたく興ある物かな」とて、ののしりて見給ふ。かくて、集まりて、見ののしりて、『持たらばや』と思へど、わざとある宝々しき物なり」とて、使には、白張一襲・袴一具賜ひて、かくのたまひて遣はす。
(吹上・上)

黄金の船は、人々の騒ぎを集める。この騒ぎは、これまでにはなかつた豪華な金細工の品への都人たちの注目度の高さを窺わせる。ここに、吹上から都へと金細工が流入したことが認められよう。

『うつほ物語』の贈答品を一覧すると、吹上・上巻以前において、金細工の贈答品はほとんど見られないことがわかる(本稿末尾に掲載した付表『うつほ物語』の贈答品における金細工を参照のこと)。しかし、吹上から「黄金の船」が贈られて以降、金細工はたびたび贈答品に用いられるの

である。次に示すのは、涼から仲忠へと贈られた品である。

かくて、大将殿は、昼の御座所に、いぬ宮抱きて臥し給へり。宮も、傍らに大殿籠り給へり。源中納言殿より奉り給へる物ども、糸を藁にて、白き組をあららかにて、絹一匹を腹赤にて、そを五葉の作り枝につけつつ十枝、鯉・鯛は、生きて働くやうにて、同じ作り枝につけたり。雉の嘴には黒方、皆白銀どもなり。鳩は黄金、その嘴には黄金入れたり。小鳥には、黒方をまろがしたり。折櫃は白銀、沈の鰹、黒方の火焼きの鮑、海松・青海苔は糸、甘海苔に綿を染めて、下には綾、衝重二十六、蘇枋の物入れたり。洲浜を見給へば、中納言殿の御手にて、

行く水の澄む影君に添ふるまで汀の鶴は生ひも立
たなむ
とあり。
(蔵開・下)

金細工を贈るのは、涼だけではない。仲忠は、あて宮腹の皇子たちをかわいがっているのであるが、その皇子たちに贈られたのが次の細工物である。

やがて、子の日がてら参り給ふやうは、右大将は、春宮の若宮に、をかしき弄び物・参り物調ぜさせ給ひ、

雛の、糸毛、黄金造りの車、色々に調じて、人乗せ、黄金の黄牛懸けて、破子ども、白銀・黄金調じて、入れ物いとをかしくて、駒に人乗せなどして設け給へり。

(蔵開・下)

仲忠は、幼い皇子たちに金細工を施したおもちゃを贈る。仲忠の行動は、将来のいぬ宮入内を予感させるものであるが、ここには皇室への献上品としても金細工の品が重宝されていることが注目されよう。また次の例は、仲忠が異母弟の小君を連れて参内した際、今上帝から人形を贈られる場面である。

見比べ奉らせ給ふに、うつくしげに貴に気高きことの、いとことのほかにもあらぬを、子に引き連れて見むぞ、面立たしくおぼえ給ふ。白銀・黄金の童の相撲取りたる形を得給ひて、まかで給ひぬ。

(楼上・上)

物語は、涼登場以前にはほとんど描かれなかった金細工の贈答品を、要所で描く。吹上巻以前の例としては、祭の使巻で兼雅から祐澄に贈られた品が唯一該当する。

桂より、左大将ぬし、よき御馬二つ、一つは飾り、一つは設けの御馬にて、舍人三十人、えも言はず装束か

せて、採物せさせて、金の枝に小さき壺をつけて、それに桂川の水を入れて、仲忠して、

「挿頭取る袖の濡るるは白波の桂川より折れるなりけり

これにさへ、あやしう」とのたまへり。

(祭の使)

しかし祭の使巻は、年立としては吹上・上巻と吹上・下巻との間に位置し、従来巻の並びが問題になっている箇所でもある。金細工の贈答品が吹上・上巻以降に限られることを考慮すると、祭の使巻を吹上・上巻より後に位置付けるのが適当であるといえるのである。

涼登場以前の贈答品の様相を見ると、俊蔭一族の琴の贈与の他、衣料品、植物、金や米が多く見られ、細工物としては、あて宮求婚譚で実忠からあて宮へと贈られた品が挙げられる。

かくて、白銀の薰炉に、白銀の籠作り覆ひて、沈を搗き篩ひて、灰に入れて、下の思ひに、すべて黒方をまろがして、それに、

(藤原の君)

かくて、例の宰相、川島のいとをかしき洲浜に、千鳥の行き違ひたるなどして、それに、かく書きつく。

(藤原の君)

実忠から贈られた香炉や州浜などには、白銀は使われてあつても黄金は使われていない。

従来、涼の吹上御殿が黄金に満ちていることについては指摘がある^⑤。しかし本稿では、物語全体の贈答品の様相を見渡した時、涼登場以降、涼に限らず都の貴顕たちが贈答品に黄金の細工物を用いていることに注目する。

なお、金細工については『竹取物語』にも車持皇子が「白銀を根とし、黄金を茎とし、白き玉を実として立てる」蓬萊の玉の枝を模して作らせたものがあり、今後併せて検討していきたい。

三 瑠璃の諸相

吹上巻以降物語世界に頻出するのは、金細工だけではなく、瑠璃もその一つに数えられる。先に挙げた吹上の住居は、「金銀瑠璃の大殿を造り磨き」とあるように、瑠璃が敷き詰められている。この瑠璃についても、吹上以前の例は、次の俊蔭巻の場面に表れるのみである。

その山の様は、心殊なり。山の地は、瑠璃なり。花を見れば、匂ひ殊に、紅葉を見れば、色殊に誇りかに、浄土の楽の声風に交じりて近く聞こえ、花の上に鳳の鳥・孔雀連れて遊ぶ所に、七人連れて入り給ひて、そ

の山のあるじを拝み給ふ。

(俊蔭)

右の場所は、俊蔭が六人の山人とともに訪れた、七人目の山人の住む山である。浄土の楽の音が間近に聞こえるこの山は、瑠璃の山であった。しかし、その後、都において瑠璃が描かれることはない。瑠璃は俊蔭巻では異界に閉じられたものであり、都での瑠璃の登場は涼の吹上の住居を待たなければならないのである。

吹上・上巻冒頭で瑠璃が再登場した後、瑠璃は絵解を除くと次の17場面に登場する。

①種松からの贈答品(吹上・上)

白銀・黄金・瑠璃などの壺どもに、さやうの物を入れて、

②源涼の吹上の住居(吹上・上)

四面八町の所を、金銀・瑠璃・車渠・瑪瑙して造り磨き、

③吹上の道(吹上・下)

紀伊国に入り立ち給ふ境より始めて、道のほのこと

種松、金銀・瑠璃して造れるなり。

④吹上での重陽の宴(吹上・下)

よろづの楽器ども、金銀・瑠璃を磨き整へて、

⑤源涼の京の住居(吹上・下)

かくて、源氏、三条に家造りて、磨き整へて、清らなり。財を貯へ納めて、よろづの調度を、金銀・瑠

瑠璃に磨き立てたる所に、

⑥源実忠の住居（菊の宴）

かくて、源宰相は、三条堀川のほどに、広く面白き家に住み給ふ、（略）殿の内豊かに、家を造れること、金銀・瑠璃の大殿に、上下の人植ゑたるごととして経給ふに、

⑦正頼家の上巳の祓（菊の宴）

百五十石ばかりの船六つ、松皮葺きの船具して、金銀・瑠璃に装束かれ、

⑧仲忠から正頼家への庚申の贈答品（あて宮）

藤中将、白銀の透箱十、合はせ薰物、沈の鶴したる透箱筆・黄金の硯瓶など据ゑ、唐の錦のいと清らなる、沈の箱に、白銀・黄金の筋遣りて、白銀の碁石筥に、白き瑠璃・紺瑠璃の石作り盛りて、双六の盤・調度、かくのごとくにて、様変へて、碁手の銭、白銀にて、同じ箱にて奉れたり。

⑨後の宮から春宮妃への贈答品（あて宮）

後の宮、瑠璃の壺、小さき四つに入れて、春宮の御局どもに、「これ、肖物にし給へ」とて奉れ給へり。

⑩源涼の京の住居（沖つ白波）

源中納言は、異町面に、金銀・瑠璃、綾・錦して作り磨きて、七つの宝を山と積み、上中下、花のごと飾りて、あるが中に勢ひて住み給ふ。

⑪いぬ宮産養九日の夜の饗宴（蔵開・上）

宮の御前には、白瑠璃の衝重六つ、下には金の杯、上には瑠璃の杯など据ゑて参りたり。

⑫梨壺よりいぬ宮産養の祝儀の品（蔵開・上）

春宮に候ひ給ふ中納言の妹のもとよりも、（略）紺瑠璃の大きやかなる餌袋二つに、白銀の銭一餌袋に、黒方を日乾しのやうにしなして一餌袋、沈を小鳥のやうに作りなして一餌袋、鳥の毛を剥ぎ集めて、青き薄様一重つつ覆ひて結ひたり。

⑬俊蔭女へ女一宮からの贈答品（蔵開・上）

一つには沈、一つには黄金、一つには瑠璃の壺四つに合はせ薰物入れて、

⑭藤壺からの差し入れ（蔵開・中）

藤壺より、大きやかなる酒台のほどなる瑠璃の甕に、御膳一盛、同じ皿杯に、生物・乾物、窪杯に、菓物盛りて、

⑮仲忠から藤壺腹皇子への贈答品（蔵開・下）

右大將は、東のおとどの南の方に参り給ひて、宮たちの御前に、沈の折敷・瑠璃の御杯の小さきして、物参り給ふ。

⑯女二の宮強奪の賄賂（国譲・下）

二の宮の越後の乳母は、『宰相の中將に盗ませ奉らむ』とたばかりて、多くの物賜はりにけるは。大きな瑠璃の壺に、黄金一壺入れて、沈の衣箱に絹・綾入れてこそ賜はりにけれ。

⑰京極邸での嵯峨院への贈答品（楼上・下）

嵯峨の院の御笛の袋は、色より始めて、いと清らに麗しき錦の袋にて、瑠璃の細き箱に入れたる、透きて見えたる、人々興じ給ふ。

①から⑤、⑩は涼に関連する瑠璃であるが、注目されるのは⑥の源実忠邸である。源実忠は、源季明の三男であり、袖君と真砂子君という一女一男をもうけながらあて宮への恋情に身を滅ぼし坂本に遁世する人物である。その実忠の住居が「金銀・瑠璃の大殿」であった。この表現が、涼の吹上の住居表現と重なるのである。

では、涼登場以前の豪邸はどのように表現されているか。次に挙げるのは、源正頼邸である。

母後の宮、三条大宮のほどに、四町にて、厳しき宮あり。朝廷、修理職に仰せ給ひて、左大弁を督して、四町の所を四つに分ちて、町一つに、桧皮のおとど・廊・渡殿・蔵・板屋など、いと多く建てたる、四つが中にあたり面白き、本家の御料に造らせ給ふ。それは、おとど町なれば、板屋なく、ある限り桧皮なり。ここに移り給ひて、一方には大殿の御娘、おとど町には宮住み給ふほどに、御子ども生み給ふこと、数あまたになりぬ。

（藤原の君）

正頼邸は、四町を占める大豪邸であった。しかし傍線部のように、涼登場以前の豪邸といえば桧皮であった。また、一条北の方も涼登場以前の「財の王」の一人であるが、一条北の方の豪邸が物語に描かれることはない。

また、①から⑰の例のうち、一重傍線部の瑠璃は七宝の一つとしての瑠璃、二重傍線部の瑠璃はガラスとしての瑠璃と見られることもできる。ただし、物語作者の認識をどこまで厳密に計れるかについては、さらなる検討を要する。^⑥本稿では、都に瑠璃をもたらした流通者としての涼の位置付けを重要視したい。

おわりに

吹上巻で源涼が登場することによって、物語世界の描写は変容する。なかでも金細工や瑠璃は、涼が都にもたらした富であると認められよう。波斯国の瑠璃の山の描写は、吹上巻の涼の住居描写に影響を及ぼしたといえるが、物語全体に影響が及んでいるわけではない。また、物語に複数存する「財の王」が金銀を鑄造していることと見ることができても、金細工は涼登場以前にはほとんど見られない。一方、涼が都に居を移した後の物語世界では、金細工が贈答品として流通し、瑠璃が宝飾建材や食器として流通している。

『うつほ物語』における涼の重要性は、消極的に捉えられ

る傾向にある。たしかに涼は、仲忠を凌駕する主人公性を持ち得なかったといえる。ただし、物語における涼の位置付けは、多角的に見る必要がある。涼に限らず、物語に登場する人物や事物を俯瞰することによって、浮き彫りにされる内実が存するといえる。

〔注〕

(1) 拙稿『うつほ物語』涼の財力と正頼家』（古代中世国文学」23 平19・3）。

(2) 斎藤正志氏は、『うつほ物語の罪過としての財貨』（叢書想像する平安文学8 音声と書くこと』平13 勉誠出版）において、うつほ物語には俊蔭女と仲忠、三春高基、一条北の方、神南備種松と涼、嵯峨院女三の宮の五人の「財の王」が存するとし、さらに自滅する三春高基と一条北の方を別として、他の人物たちが金銀の私鑄銭を鑄造できた「財の王」たりうるとする。

(3) 室城秀之氏『『うつほ物語の空間』—吹上の時空をめぐる—』（『国語と国文学』昭62・5『『うつほ物語の表現と論理』平8 若草書房 所収）。

(4) 前掲（2）。

(5) 河添房江氏は、『源氏物語と東アジア世界』（平19 NHKブックス）において、『宇津保物語』の世界でも、黄金のイメージがしばしば充滿し、特に吹上巻の神南備種松の邸は、この世に極楽浄土を再現した構えで、（略）白銀や瑠璃とともに黄金の物質的富がくりかえし強調される」と指摘す

る。

(6) 伊藤守幸氏は、『瑠璃に荘嚴された世界—文学史的／文化史的視座から見た『うつほ物語』—』（『うつほ物語大辞典』学習院大学平安文学研究会編 平25 勉誠出版）において、『うつほ物語』の七宝としての瑠璃が天然鉾物ラピスラズリであるとする前提に立ち、『青色而如玉者』として想像されていたとする。また、河添房江氏は、『光源氏が愛した王朝ブランド品』（平20 角川選書）において、ガラスとしての瑠璃をイスラム・ガラスとみている。

*うつほ物語本文の引用は、『うつほ物語 全 改訂版』（室城秀之校注 平7初版、平13改訂版 おうふう）に拠り、一部私に傍線や注記を施した。また引用末尾に巻名を記した。

（本学准教授）

〔付表 』うつほ物語』の贈答品における金細工〕

〔6 祭の使〕

頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応
203・8	兼雅	祐澄	壺を付けた金の枝	賀茂祭の使	返歌

〔7 吹上・上〕

頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応
256・6	種松の妻	涼たち	薫物の細工物	林の院での花宴	蝶に和歌を書き付ける
262・14	涼、種松	仲頼、行正、仲忠	細工物、衣料品、食料品など	帰京の際の土産	
270・16	涼、種松、種松の妻	仲頼、行正、仲忠、供の人々	細工物、衣料品、食料品など	帰京の際の土産	
273・9	仲頼、仲忠、行正	内裏、正頼、兼雅など	細工物、衣料品など	吹上の土産	お礼の禄（正頼）
276・5	仲忠	正頼、あて宮など	牛、衣料品、黄金の船など	吹上の土産	黄金の船を一度返却、お礼の禄

〔8 吹上・下〕

頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応
285・9	涼（嵯峨院の代わり）	場の人々	衣料品、薬、香、細工物など	重陽の宴の禄	

〔9 菊の宴〕

頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応
314・4	正頼など	嵯峨院太后宮	調度品、衣料品など	六十賀	
317・8	正頼？	嵯峨院太后宮	細工物など	六十賀	尚侍の歌に返歌
319・6	嵯峨院太后宮	あて宮	櫛など	六十賀	
333・3	仲忠／涼	あて宮	黄金の細工物	上巳の祓	返歌、贈り物を返却

〔10 あて宮〕

頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応
360・11	あて宮	殿上・帯刀の陣	料理など	庚申（入内の挨拶）	

372・2	春宮、兼雅、季明 (忠雅?)、仲忠、涼	あて宮	豪華な品々	七日の産養	御衣、襦袢のお返しなど
361・7	涼／仲忠	春宮・あて宮	料理など	庚申	正頼、二人に感心する

【11内侍のかみ】

440・17	仁寿殿女御	俊蔭女	衣料品など	尚侍就任祝い	
頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応

【13蔵開・上】

482・2	藤壺	女一宮	衣料品、薫物など	いぬ宮誕生七日の産養	仲忠が返事の手紙。仁寿殿女御が使者に禄。仲忠、心遣いに感謝。俊蔭女も見る。
484・9	涼	(いぬ宮)	衣料品など	いぬ宮誕生七日の産養	
496・12	梨壺	仲忠	蜜、細工物など	いぬ宮誕生九日の産養	仲忠と兼雅の遣り取り。仲忠の返事。使者に禄。
497・6	大殿の君	仲忠	お粥など	いぬ宮誕生九日の産養	人々興じる
503・11	女一宮	俊蔭女	后宫からのお祝い	彈琴への感謝	仲忠と兼雅、仁寿殿女御の筆跡に感心。后宫や涼、梨壺の贈り物にも言及。女御に返事。使者に禄。
505・7	仁寿殿女御	朱雀帝、靱負の乳母	食料品など	いぬ宮誕生祝いのお裾分け	朱雀帝、乳母たち、感心する

【14蔵開・中】

558・3	俊蔭女	仲忠	洲浜など	涼への産養の品	
545・12	藤壺	仲忠、涼、藤英など	食膳	差し入れ	仲忠、細工を添えて返事
頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応

【15蔵開・下】

585・3	涼	仲忠	細工物など	産養のお祝いのお礼	お礼の手紙
頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応

941・13	俊蔭女、仲忠	朱雀院、嵯峨院など	絵冊子、高麗笛など	京極邸での祝宴の贈り物	院、人々、興じる
頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応
【20楼の上・下】					
875・5	朱雀院	女一宮と俊蔭女	白銀・黄金の細工物	京極邸での祝宴への心遣い	返事の手紙。
847・8	今上帝	小君	白銀・黄金の人形	仲忠、小君を連れて参内	俊蔭女、小君の評判に喜ぶ。
頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応
【19楼の上・上】					
774・15	仲忠、涼、藤英など	仲頼	衣料品、調度類など	水尾訪問の手土産	仲忠に返歌
頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応
【18国譲・下】					
725・16	兼雅	宮、女宮たち	馬、鷹など	帰京の土産	
690・12	春宮	藤壺	白銀・黄金の橘	里邸の藤壺への心遣い	大宮、橘を分配。返事の手紙。使者に禄。
頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応
【17国譲・中】					
649・9	春宮	藤壺	金銀の細工物など	里邸の藤壺への心遣い	藤壺興じる。返事の手紙。使者に禄。
頁・行	贈り手	貰い手	金細工を含む贈答品	理由・場	対応
【16国譲・上】					
607・11	俊蔭女	宮たち、祐澄など	衣料品	賭弓の時の被け物	
604・12	仲忠	藤壺腹皇子たち	おもちゃなど	子の日用	
587・7	涼	仲忠	車	女三宮を迎えるために仲忠が依頼	